

用美一体の習字教育（一）

松岡雲峰

私はここで固苦しい用美一体論などを論ずる氣持はもつていらない。あたり前のことであたり前にごく平易に述べてみたいが。實はこれは昨年十月の第一回四國習字教育研究大会の時の講演原稿に若干手を加えたものであることとことわつておく。

文字の發生は歴史をひもどくまでもなく、人間の用的欲求から出ていることは申すまでもない事であり、これが時代の変遷と人情の推移によつて用から美へ—即ち書が芸術として發展してきた事実も最早説明を要しない点であります。

しかしながら書道がいかに發展しようと、文字のもつ用の役目は永久に消え失せないであろう事は世の何人も異論はないであります。ここに文字を素材として成り立つてゐる書道の宿命があり、習字教育乃至書道教育の考うべき問題がひそんでゐるのであります。

中国の王羲之・虞世南・歐陽詢・褚遂良などの書は、藝術書としてよいばかりでなく、又实用書としても最上のものであります。顏真卿の書になりますと、斐將軍詩などのように、全く鑑賞を主として实用ということを意に介さぬものもあり、又張旭の狂草などになると殆ど实用ということを無視しているものもあります。

そこで芸術書道でありますが、昔から書は心芸であるといわれております。これについて中林梧竹は

今の書家口を開けば即ち曰く書は心芸なりと。書の心芸たる固より論なし。しかも心芸あに容易ならんや。蓋し己の体様を以て己の心情を写すこれ心芸

なり。千字を書して千字一の如く、万字を書して万字一の如し。世人以て妙となす。しかもこれ腕指の巧のみ、心芸に非るなり。韓愈曰く、往事張旭草書をよくす。喜怒きん窮、憂悲愉快怨恨思慕、酣醉無聊不平、心に動くれば必ず草書に於て之を發す。故に旭の字變動鬼神の端倪すべからざるが猶し。と、又、

張旭懷素の書における、なお兵の奇あるが如し。變化測るべからず。しかもこれ書法の正に非るなり。觀るべくして学ぶべからず。恐らくは虎を画いて成らず、かえつて狗に類せん。と

このように書はもとより心芸ではあるが先人の書の中においても觀るべくして学ぶべからざるの書というものがあると言つておるのであります。つまり藝術書道としてはよいが法書（手本）として学ぶのには都合が悪い書があるというのであります。勿論初学者を対象としての言であります。

そこで次に小中学校習字教育の目標を考えることにします。小中学校における習字教育の目標が

「いつ、いかなる場所で、いかなる用具を使用しても、その場に適応した文字を書き得る書写能力をつけるとともに、広く鑑賞する力を養い、これによつて生活を豊かにし、教養を高め、人間生長や実生活に役立たしめる。」

という点にある以上、書写能力の養成ということがその目的の第一義的のものであることは最早論をまたないのであります。しかもなお鑑賞力の養成ということも見逃してはならないのであります。

この目標は文字のもつ用的生命と、書道としての特殊性からくる必然性に立脚していることは誰にも分る点だと考えるのであります。これを現在の教科課程の実態から考える時に、私は小中学校の習字教育はどうしても用美一体の習字教育でなければいけないと考えるものであります。ここに教育書道の生命があると確信しております。

「小学校の毛筆習字は藝術科として見る時にのみ価値がある」とうそびいている人がありますが、とんでもないことあります。用の面を離れて小

学校習字教育は考えられないのです。そのような考えの下に、創作だ、やれ個性尊重だとその美名にかくれ、更にはその指導者自身の趣味性から特殊な教育をやつている人があるようですが、これは断じて誤りであると思います。

私は去る一月上京の際、上野美術館で東京都内小中学校児童生徒の作品展を参觀する機会を得たのであります。これについてはすでに前号で谷脇梅翠君が意見を述べておられます。全くあの通りです。今私の論じていることは所謂専門的な書道でなくて習字教育についてであります。考えねばならない点はその点であります。専門的な一般芸術書道と、教育書道というものをよく事を分けて考えねばならないのであります。東京においてしかり、大阪においてしかり、教育書道というものはすでにとつづくに割切つて考えられています。この事は何も驚くにあたりません。私をして言わしめるならば極めてあたり前の事であります。教育者が未だごく一部にあることは習字教育界のため残念でなりません。

(28号)

用美一体の習字教育（二）

松岡雲峰

教育書道とは

教育書道は、芸術書道でもないし実用書道でもありません。又これと併立した特殊の書道でもありません。教育書道とはあくまで教育の場における書道でありますから、芸術書道と実用書道を包含した書道でなければならないと思うのであります。

したがつて実際教育にあたつてはそれぞれの学校種別（段階）に応じ、芸術

的な面と実用的な面を一方に偏することなく円満に発展育成していかなければならぬと思います。その意味は小・中・高・大何れに於ても、用と美を「一対一」にみるというのではなく、そのあるべきすがたにあらしめるという意味であります。したがつて小・中の如く国語科の中における習字と、高校に於ける芸術科書道とではそれぞれ用と美のウエイトに差のあることは勿論であります。つまりこの事が円満であり偏していないことであります。さて、教育者はこの点を十分腹に入れておかねばならないと思うのであります。

書道教育にあたる者

現場の教育にあたつていられる方々の中には、書道に興味をもつてゐる方もあろうし又大した興味は覚えないが教師のつとめとして努力してゐる方もあろう。又、中には書家とよばれるほどの方もあります。それは様々であります。

書を専門的に研究し、いわゆる書家という名の下によばれている人、又はそうありたいとひたすらに書の道にはげんでいる人々、これらの人々のその個人としての書の考え方、研究、書作等は全く自由であります。古典主義もよからうし、新古典主義もよからう、はた又前衛的な研究に没頭したつて一向差支えないし、それぞれその人独自の立場に立つて大いにやつてしかるべきだと思います。

しかしながら一旦教育者としてその立場に立つたならば、すべてこれ教育の目的の下に進むべきであつて、徒らに自己の趣味性から教育を弄ぶことは大なる罪悪といわなければなりません——吾々は教育者であるという厳然たる事實を忘れてはなりません——教育の場に於ては如何にすぐれた芸術家であつてもその個人を離れ、公人としての教育者でなければならぬのであります。書家が書を教えるのでなく教育者が習字、書道教育を行うのであるという点を忘れてはならないのであります。

創意といふこと

創意を無視した押しつけの教育は勿論排撃すべきものであります。が、往々にして子供のためを子供の創意と誤って解釈する人があるようあります。奇抜なものや型に入つてない作品がすべて子供の創意による作品であります。個性的な作品であると即断することは大変危険であります。

子供の稚拙な作品の中には非常におもしろいものもある事は多くの方の経験ですみの事と思います。大人から見て筆意と見られるような場合もあります。しかしこれを過大評価し買いかぶる事の危険性については比田井天來翁が、かつていましめておられたのであります。がよく注意しなければなりません。

創作という仕事の如何にむづかしいものであるかという点は、私の説明をまつまでもなく書を学ぶ多くの方にはよくお分りの事と思います。でたらめはできますが本当に自分の仕事ということになるとなかなかむづかしいものであります。創意というようなものはただむやみにこうやってみるとあやつてみて出るものではなくて、長い鍛錬の中から培かわれ芽生えてくるものでなければ意味はないと思っていますがこれは誤りであります。そうでない作品には高い格が出ていません。見る人から見れば分るのであります。子供にお手本をみせて色々考えることは大事でありますが、ただむやみにああやつたり、こうやつたりとさすことが創意を生かし芸術的芽生えを育てる事になるとのみ考えるのはどうかと思います。やっぱり手本は手本であります。

手本を学ぶということ

書道に於ては手本を対象として学ぶのが普通であります。即ち多くは臨書（手本を見て書く）から出発します。臨書には色々の学び方がありますが、私は子供が手本を学ぶ事を一応模倣と考えております。模倣を目運（手本なしで書くこと）創作への土台と考え基礎と考えていてからであります。勿論模倣が終極の目的と考えてではありません。創作へ連つた模倣と考えております。梧竹堂書の中に

筌^{せん}（魚をとるうえのこと）というものがあるがこれは魚をとるところの道具であつて魚ではない。魚という目的物をとるための道具にすぎない。だからあくまで目的物は魚であつて方便として筌を使うのである。又蹄^{てい}（兎をとるわなのこと）というものがあるがこれは兎をとるために使う道具であつて兎ではない。兎という目的物をとるために使う道具にすぎない。だからあくまで目的物は兎であつて兎をとる方法として蹄を使うだけである。だから莊周

は、目的の魚を得たならば筌は最早必要なものでないから忘れててもよいし、兎をとったならば蹄はもう忘れてしまつてよい。と云つております。

これは莊子の引用であります。その目的物の魚と兎が学書の道では自分の書であり、筌と蹄が法帖であります。つまり筌蹄と熟して「目的を達する方便」の意に使いますが、手本を筌蹄として模倣に徹することは大切な事であります。手本を単なる参考物位に考えていましたと、下手に作った筌や蹄のようなもので魚も兎もなかなかとれないだろうと思います。

用美一体の習字教育（三）

松岡雲峰

（29号）

手本について

皆さんの顔はそれぞれちがっていますね。世界中の人の顔はみんなちがっています。一人として同じ人はいません。そのようにみんなの字はお手本と同

じようになつてはいけません。このお手本はこう書いてありますが色々と工夫して書いてみなさい。お手本は参考ですよ。……こういう事をいう人がある。

うつかり聞いていると成程と思う方があろう。こういう考え方の先生を新しい考え方の先生と思う方もある。しかしながらこういう人は手本をそれ位にしか見ない人であり、義之や空海の書をみても何のおどろきも何のおろしさも感じない人であります。まして児童生徒に手本を書いても自分の書をその程度にしか評価しない人であり自分の書に自信のもてない人と思われます。

こんな考で児童生徒に手本の見方を指導する事は結果的に手本を軽んずる悪い考を起こす事になり、手本の生命にふれ得ないで皮相的な見方に走る悪いせさえ助長する事にもなります。手本はどこまでも手本であります。ただ手本を習うその後の指導はどこまでも子供のよさは伸ばしてやらねばならない事は勿論であります。

型と個性

型に入れてはいけないと言います。無理に入れる事はよくないにしても、手本の型教師の型に似てくるのは極く自然であると私は思つております。入れるのでなく入るのであります。入つてくるのであります。求めてくるのであります。指導する教師の書風に似、手本に似てくる事は一概に排撃しなければならない事とは思いません。似てくる事は自然でありますからこの自然にさからう必要はありません。

学校教育におきましては普通一般の中正な書風がよいと思います。そしてそれを素直に勉強する事によつて書写力はついてきます。又きちんとした形もとれるようになつてきます。ただこの場合単に機械的に線を引いたり形をくみ立てたりすることをさけ、一本の線一つの点に自分の感情を盛りこんでいくような指導が大切だと思います。そうする中に一つのきまつた書風の手本を学んでも、そのきちんと整つたものの中に所謂個性がひらめいてくるので

あります。でたらめをやらしたもののが個性が出ており、きちんと整つたものに個性が出ていないという考え方は誤りだと思います。個性は鍛錬を経てにじみ出てくるものであります。

平凡の美

なるほど人の顔はそれぞれがついていても、目鼻口はそれぞれあるべき所にちゃんとあります。これは天の理であります。これと同様に文字には定形こそありませんが、長い伝統によつて作られた伝統の形があります。この伝統の形を先ず学ぶのが基礎であります。そしてその美しい形を守りながら芸術的教育も可能であります。徒らに奇を求める必要もなければ、又そうする必要もありません。平凡の中にある美が真の美であります。

小中学校の段階で何でゆがみの美を強調する必要がありましょうか。短い線を殊更に長くしてみたり、小さい線を殊更に大きくしてみたり、整った形を殊更にゆがめたりさす事のみが芸術的な指導であるとはいません。

あるべき所に目や鼻や口があります。……しかもあるべき所にきちんとある目や鼻や口それ自体の美しさに魅力があります。これを書についてみれば点画の美しさであります。点画所を得る事は書の基本であり、先ずその点画の美しさから出発するのが習字教育における芸術面の仕事のはじまりであると思います。したがつて点画の指導にしても一つの線を引く場合、たとえば筆管を立てて引けばどうなるか、ねせて引けばどのような線になるか、筆鋒を開けばどんな線になり閉じればどんな線になるか、速度は、筆圧は、と云つた面に入つてくるともうすでに用の面でなく美の面に入つてゐるのであります。

形にしましても不整然の美のみが美で、整然の美が美の中に入らないわけはありません。中正な書風を学ぶことによつて用美一体の習字教育がなり立つてくると思います。又そこに学校教育における習字教育の意義があると思つております。